

# JAPAN ICOMOS / INFORMATION

INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES

JAPANESE NATIONAL COMMITTEE 日本イコモス国内委員会

6期—7号



2005.10.10

## CONTENTS ♣

はじめに／前野まさる 01

From the President/ Masaru MAENO

2005年次第3回拡大理事会報告(9/10)／赤坂 信 02

Reports on the 3rd Meeting of the Executive Board, 2005  
Makoto AKASAKA

港湾都市「鞆の浦」の歴史を活かしたまちづくり緊急提言／益田兼房 08

Urgent Proposal for the Town Planning of Harbor Town  
"Tomo-no-ura" in Consideration of the History  
Kanefusa MASUDA

「鉱山遺跡の顕著な普遍的価値と保存管理に関する  
専門家国際会議」を開催／足立克己 10

Experts Conference on the Universal Value of Mine Heritage and the  
Conservation/Katsumi ADACHI

お知らせ／赤坂 信 12

Announcement/Makoto AKASAKA

事務局日誌 14

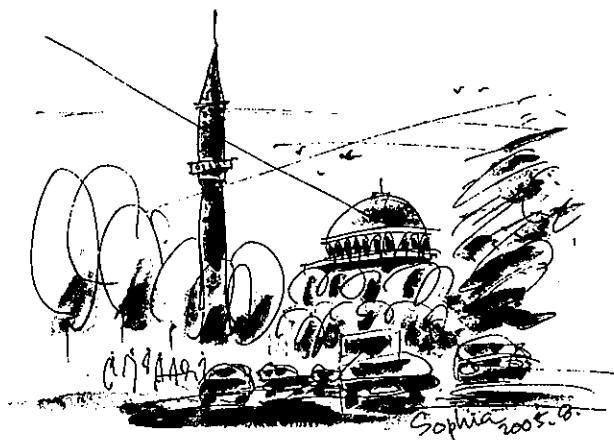
Diary

はじめに  
前野まさる



今年の日本イコモス国内委員会の理事会は、鞆の浦問題もあって開催が変則的になってしまいました。国内の世界遺産関係各地で開催する約束も果たせませんでした。鞆の浦問題では、益田理事を主査とする「文化遺産と都市開発の課題検討小委員会」の皆さんが真剣に当って下さっています。しかし、まだ前途多難なようです。

文化遺産の危機は戦乱や開発によるものばかりではありません。昨年暮れのスマトラ沖の地震と津波からはじまり、ドイツの洪水、中国の河の氾濫、新潟の地震と豪雨、続くフロリダのハリケーン災害。地球温暖化が原因なのか、とにかく異常な自然現象。こうした時、もちろん人命救助が第一であることは言うまでもありませんが、同時に文化遺産の保存を進めている私どもの立場からも、このような自然災害から文化遺産を護る手だてを建てなければなりません。我が国は様々な自然災害の多発地帯にあり、文化遺産の危機管理研究では国際的にも先進的な面もあります。皆さまの一層のご努力を願っています。



イラスト(全て)／前野まさる

# 2005年度第3回拡大理事会報告

2005年度第3回拡大理事会が去る2005年9月10日(土)午後2時から午後6時まで、文化財保存計画協会(東京・恵比寿)で開催された。出席者は委員長:前野まさる、理事:赤坂 信、岡田保良、河野俊行、杉尾邦江、杉尾伸太郎、西浦忠輝、益田兼房、矢野和之、山田幸正の各氏。報告事項および審議事項は以下の通り。

## 報告事項

報告事項に先だて、山田理事からJPICOMOSのホームページのデモンストレーションが行なわれ、今後実現に向けて、山田理事を中心に検討を進めることになった。

### 1. 2005年度第二回理事会の概要報告

前回の議事要録(記録:山田理事)に基づいて、前野委員長より2005年度第2回理事会の概要が報告された(JAPAN ICOMOS / INFORMATION 誌6期6号参照)。

### 2. 国際会議報告

#### (1) ICOMOS アジア太平洋地域会議について

2005年5月30日~31日の日程でソウルのGRAND HILTON HOTELを会場に「アジアの歴史的都市集落の観光運営」をテーマに2日にわたって行なわれた。ポストツアーは6月1日、慶州の新羅遺跡の視察をした。参加国は、Australia, Canada, China, India, Indonesia, Japan Korea, Philippine, Sri Lankaの9カ国。日本からは西村幸夫氏と私の2名が参加した。会議はテーマに沿って、参加した各国の歴史的遺跡や集落の観光問題について事例報告や観光問題について、論議した。会議の進行は時間も正確に進行した。会議の費用は韓国文化観光省が大半を負担し、会議の企画運営は国際会議のコンサルタントが行っていた。通訳は韓英の同時通訳が入っていた。

私は愛媛のCIAV会議で報告された町並みの観光が住民に与える問題を中心に報告したが、参加者は町並み

と住民の問題にはあまり関心がなく、専ら考古遺跡や宗教遺跡、自然遺産などの観光政策に関心が有るようであった。オーストラリアでもシドニー港ロック地区観光対策を論じていた。オーストラリアには観光客を観光スポットに配送するエクプローラバスがあり観光対策として成功している。ソウルの祭事宮廷行列は3年間で観光客が3倍増し、2005年には160万人の人が集まり観光行事として成功したと報告。この他、観光にともない文化遺産の安全管理も論じられた。

この会議のアジア各国の参加者が行政担当者、コンサルタント、研究者などで、各国とも観光立国政策で熱が入っており、住民問題で観光開発に水を差すような見解は受けなかった。現在、日本イコモス関係者でもアジア各地の歴史的遺跡や町並み保存調査をしている方が多くおられるし、ジョクジャカルタには職人街を含めた街の筋書きを読む街歩き運動をしている大学教授がいる。日本の経験、アジアの経験を交えたアジアの文化遺産保存活用と観光について論議する必要があるように思う。(前野まさる)

#### (2) イコモスの理事会と地域会議

去る2005年6月13日から15日にかけて、キューバの首都ハバナにおいてイコモスの理事会が開催された。その概要を紹介したい。同理事会は、本年10月に予定されている西安での第15回イコモス総会の前に関われる最後の役員会であるという性格上、西安大会の準備状況が詳しく報告され、具体的な会議の枠組みが詳細に検討された。西安大会へ向けての中国イコモスの体制は大変意欲的で、同理事会にも約8名の代表団がハバナへ乗り込み、準備状況の報告を行った。準備はおおむね順調で、同時に開催される国際シンポジウムも事前の抽象トクト提出が500件を超え、時間の割り振りに苦勞するといううれしい悲鳴が聞こえてきそうである。総会に向けた中国当局の予算も180万元にのぼると報告された。西安では最終日にセッティングと保全に関する西安宣言が採択される模様で、そのための原案作成も進められている。

また、理事会ではイラクの国内委員会が再生された



ことが報告されたほか、キルギス、モルドバ、タジキスタン、シリア等の国内委員会の結成が報告された。

国際専門委員会では、新たに設立された20世紀建築の委員会の規約や委員構成などが議論されたほか、保全理論に関する委員会の設立準備の状況が報告された。

憲章に関しては、文化の道に関する憲章の第4稿が紹介されたほか、インタープリテーションに関する憲章の準備状況が報告された。

なお、西安総会時の役員選挙への立候補状況が書類で報告された。会長に2名（ドイツ、ギリシア）、事務局長に2名（マルタ、カナダ）、監査に2名（ベルギー、イスラエル）、定数2名の副会長に8名（アメリカ、マルタ、オーストリア、ハンガリー、ベニン、中国、アルゼンチン、スペイン）、定数12名の執行委員に15名（ウクライナ、ギリシア、イタリア、英国、ブラジル、ノルウェー、フランス、日本、キューバ、ブルガリア、マケドニア、ポーランド、ベルギー、メキシコ、ドイツ）が報告時点で立候補が確認されている。なお、立候補は大会初日の夕刻まで受け付けられるので、今後増える可能性がある。日本が推している岡田保良先生の各方面への支援要請をお願いしたい。（西村幸夫）

### （3）考古遺産管理運営国際委員会（ICAHM）2005年の動き

考古遺産管理運営国際委員会(以下ICAHMと略す)の2004年次総会は、2004年9月にフランスのリヨンで開催された「考古学者ヨーロッパ協会」(EAA) (9月8日・9日)の初日にあわせて開催された。この前後の動きについては、2004年12月11日付けの「国際専門分科委員会報告」において記したので、それ以降の若干の事項について報告する。ただ、リヨン会議の議事録がいまだに届いていないので、どのような具体的な議論があったのか未確認である。

リヨン会議までの動きは比較的活発であった。ICAHM内に設置されたHeritage at Risk Sub-committee (責任者：Marilyn Truscott)の求めに応じてわれわれはHeritage at Risk: regional reportを2004年6月に送り、同11月30日にもレポートの集約状況ととりまとめの予定

について督促をした。また、リヨン会議のプログラムに「副会長の報告」の欄が設けられていたので、これにも小野はHeritage at Risk関係で小文を送った。

しかし、その後の委員会の動きは、鈍いというよりもほとんど目立った動きがなくなったように見える。2005年7月7日に事務局長のChristophe Rivet (カナダ)宛てに問い合わせをおこなった。以下は、その回答の概要である。

**若干の動き：**ICOMOS本部事務局からICAHM宛てにくつつかの問い合わせがあった。1) 世界遺産登録への専門家派遣の要請、2) 特にヨーロッパの都市環境下の考古学的遺跡の保存、修復、顕彰記録の評価について、3) ユネスコ統計局からICAHMに対してアメリカ考古学研究所の年次総会にあわせて、共同で遺跡管理と修復の統計的指標に関するワークショップを開催する要請などがそれである。

これに合わせて、2006年1月に1) 関連で共同のワークショップを支えること、2) 関連で2005年10月のブリュッセル会議に参加すること、3) 10月の西安総会におけるICAHM会議を組織することの3点が予定されている。

**問題点：**以上の通り、この1年間ほどの間ではICAHMとしての主体的な動きはほとんどなく、別の所からくる要請にどう応えようとしているかが窺い知れる程度である。問題点を私たちの立場から要約すると次の3点にまとめられる。1) ICAHM委員長のBrian Egloff (オーストラリア)からの働きかけがなく、委員長としてICAHMをどのような方向に積極的に展開しようとするかの意志が見られない。2) 今までここ数年にわたって議論してきたことで重要な課題はたくさんあり、私たちが積極的に問題を提起してきたが、議論の積み重ねと実践によって前進するというルールが実現していない。3) 世界各地のICAHMのメンバーを動かし得ていない。

ICAHMの執行部の改選が2006年であるので、現状は全体に分散傾向で状況は宜しくないが、私たちが送った報告の後始末や積み残しの課題など、ひきつづき督促する予定である。

(小野 昭・岸本雅敏)

#### (4) 国際専門委員会「文化の道」委員会報告

(中国西安での第15回イコモス総会にむけての活動)

◆本年度(2005年)の「文化の道」総会は中国西安でのイコモス第15回総会時の10月18、19日両日の18:30~20:30にイコモス総会会場で開催される主要なイベントと議題は下記の通りである。

##### 1) 次期役員選挙

役員選挙は8月10まで、会長1名、副会長(各地域、アフリカ、アジアパシフィック、アメリカ、カナダ、南アメリカの4人)各地域のアシスタント副会長、事務局の立候補締め切り、追って10月7日締め切りで郵便による投票、2005年総会時に開票の予定。会長の要請で杉尾は副会長アシスタント(現)に再び立候補した。

##### 2) 新メンバーの承認

日本からアソシエイトメンバーに推薦された大野渉も承認の予定、本総会に出席の予定

##### 3) カルチュラルルートの最終憲章の最終審議

4) イコモス総会の Scientific Symposium の第4分科会(Cultural Route)の発表に選定されなかったペーパーの発表の機会と第4分科会の全体討議の補足を行なう。また特にカルチュラルルートの定義、概念についての討議をCIICのエキスパートを主体に行なう。

◆イコモス総会での第4分科会の研究発表論文の査読、選定を選出されたCIICの主要メンバーで行ない、杉尾は英語論文の査読と選定を行なった。また、CIICの役員は全員論文発表を義務づけられたので、杉尾も発表の予定。(杉尾邦江)

#### (5) 歴史的庭園文化的景観国際学術委員会 2005 年会議報告

##### 1) 日時、場所

歴史的庭園文化的景観国際委員会(International Committee on Historic Gardens-Cultural Landscapes)が、2005年2月11日(金)及び12日(土)にベルギー国ブリュッセルにおいて開催された。

##### 2) 出席者

日本からは、杉尾伸太郎(日本代表・副委員長)が国

内委員会からの代表として出席し、委員の大野渉(2003年マスカウ会議に続いて2回目の出席)も参加した。オランダ、イタリア、オーストリア、ベルギー、カナダ、フランス、ドイツ、メキシコ、ノルウェー、ポーランド、スペイン、スイス、イギリス、チェコ、デンマーク、ギリシャ、ハンガリー、ポルトガル、スペインが出席した。

##### 3) 主な決定事項

###### ①会長、副会長、理事(Effective Member)の選挙

会長のデヨング(オランダ)の任期満了に伴い、新たな会長、副会長の選挙が行なわれた。また、数名の理事任期満了にともない、欠員が発生するため、同選挙もあわせて行われた。選挙は、参加者のうち会議開催時点で

の理事のみによって行なわれた。会長にはルイーダ(イタリア前副会長)、グッドチャイルド(イギリス前理事)、オドネル(アメリカ)が立候補していた。選挙の結果は以下の通り。今次より、委員会内に7つの地域区分を設定し、各地域ごとに副会長が選任された。

会長(EUフランス語地域担当) ルイーダ(イタリア)

副会長(南米地域) ベルジュマン(アルゼンチン)

副会長(EU英語グループ、北米地域)

グッドチャイルド(イギリス)

副会長(中東欧地域) フォン・クロシク(ドイツ)

副会長(地中海地域) ルエンゴ(スペイン)

副会長(アジア・オセアニア地域)

杉尾伸太郎(日本)

副会長(アフリカ地域) 未定

###### ②規約の改定

現在、各国内委員会、各国際委員会で行なわれている規約の改定について、本委員会についても原案が事務局より提示され、議論された。規約の骨子については合意に至ったが、委員会内の地域区分や地域区分ごとの委員枠割り振りといった詳細事項については、ひきつづき議論され、細則としてまとめることとした。

###### ③その他の討議内容

◆現在EUで進められている教育水準の統一の取組みの一環として、造園教育分野においても、EU各国の大学、大学院で統一した教育水準を確保するため、教育内容



の標準化が進められている（ルノートルプロジェクト）。本プロジェクトについての経過報告が簡単に行なわれた。

◆本委員会の初代議長を務めた故レネ・ベシエール氏の蔵書をもとに建設された造園専門図書館が、ベルギーのブリュッセルに整備されており、インターネットにより蔵書の検索が可能のほか、主要な書籍中のイラストをインターネットで閲覧することができる。（<http://www.bvrp.net>）

◆本委員会のホームページ及び公式パンフレットを作成する必要性について討議された。

◆世界遺産の審査に関連して、国際委員会には新たな役割が発生していることから、世界遺産の推薦・登録に関する手続きや文化遺産の審査に関する実務的なノウハウについてのワークショップを本委員会内で行なう必要性について議論された。

◆庭園の保全方法に関する議論が、オーストリア国ウィーンのシェーンブルン庭園を対象になされていることに関する報告がオーストリア代表からあった（生垣の凍結的保護vs動的保護）。本件に関する論文は、西安の総会にも提出される見込みである。

#### ④今後の予定について

本年10月に中国西安にて開催されるイコモス総会にあわせて本委員会を開催する可能性について討議されたが、出席できない国も多いので夏になって開催中止となった。したがって次回は2006年4月にポルトガルで開催、2007年はノルウェーで開催、2008年はアメリカが開催国として立候補している。（杉尾伸太郎）

### 3. 名義使用について

#### (1) 特定非営利活動法人文化財保存支援機構

代表 三輪嘉六（西浦忠輝資料回覧）

「カンボジア・アンコール遺跡群スタディーツアー」

2005年11月19日～23日 後援

#### (2) 特定非営利活動法人全国町並み保存連盟

代表 服部豊（前野まさる資料回覧）

第28回全国町並みゼミ美濃大会

2005年9月16日～18日 後援

### 4. 国際文化遺産コンソーシアムについて

去る8月30日、文化庁記念物課国際協力室の勝平氏と樋口氏を迎え、表記の件で説明を受けた。「平和文化国家を標榜する我が国の国際貢献を進めるに当っては、経済面での協力と人道支援に加えて、文化への支援・貢献を一体として行なうことにより大きな効果が生まれるものと考え…」[各研究機関の保有する情報の交換・研究者等の人的交流を進めるための体制を整備する]協力機関／文科省・文化庁（事務局）、外務省、民間援助機関、国際交流基金、国際協力機構など。日本イコモスの協力を求められた。

### 5. 小委員会報告

#### (1) プロヴディフ旧市街保存事業協力班小委員会(第5小委員会)

Bulgarian-Japanese ICOMOS Joint Working Group は、去る7月下旬から8月上旬にかけて、「2005年次第2回現地会議」を開いた。日本からの出席者は、石井 昭(7/25～8/6)、前野まさる(7/29～8/5)、矢野和之(7/29～8/4)、麓 和善(7/29～8/5)の4名で、その主な内容は次の通りである。

〔ワークショップ〕“Architectural Preservation Practice in Bulgaria and Japan”と題するワークショップを、Bulgarian-Japanese ICOMOS Joint Working Group とプロヴディフ市の共催で、8月2～3日に、プロヴディフ旧市街において開催した。出席者は、H.Staneva、V.Todorov、A.Tokmakchiev(以上、ブルガリア側保存事業協力班メンバー)、石井 昭、前野まさる、矢野和之、麓 和善(以上、日本側保存事業協力班メンバー)、T.Stoykova (Ancient Plovdiv Municipal Institute)、R.Proykova、V.V.Kolarova、V.P.Varbanova、Z.i.Geneva、V.I.Gerginova (以上、主任修復建築家)及びブルガリアイコモスメンバー他、総数30余名。

第1日目は、ブルガリア側から報告で、今回の保存事業の対象建物である木造家屋3件(4棟)の本格修理と4件(4棟)の応急修理に関して、次の通り、それぞれの修理を担当する主任修復建築家から発表があった。

1) Romyana Proykova: Preservation of Bayatova and

Bakalova Houses 2) Vyara Vasileva Kolarova: Preservation of Klianty House 3) Valentina Peneva Varbanova: Preservation of Georgiady House 4) Zdravka Ivanova Geneva: Preservation of Nedkovich House 5) Veneta Ivanova Gerginova: Preservation of Hindliyan, Nihanyan, and Stambolyan Houses

第2日目は、主として日本側からの報告で、今回の国際協力事業の概要説明と日本の保存修理に関して、次のとおり発表があった。1) 石井 昭: Outline of Our International Cooperative Project 2) 麓 和善: Architectural Preservation Practice in Japan 3) 前野まさる: Protection of Vernacular Wooden Houses in Japan 4) 矢野和之: Rehabilitation Practice for Historic Cultural Assets 5) Hristina Staneva: Remarks on Japanese Architectural Preservation Practice

本ワークショップは、Bulgarian-Japanese ICOMOS Joint Working Groupの主要メンバーが一堂に会した初めての会議であり、またブルガリアの文化財修理技術者と日本人発表者との間で活発な質疑応答があり、ブルガリアー日本の文化財修理に関する相互理解にとって、極めて有益なものとなった。

〔文化無償申請準備〕UNESCO/Japan Trust Fundの助成による重要建造物8棟の本格修理と応急修理に加えて、外務省の助成である文化無償の申請のための会議およびブルガリア関係機関との調整を、H.Staneva、石井 昭を中心とするTask Forceが、上記ワークショップの前後(7/26～8/1、8/4～5)に開催された。文化無償申請事業の内容は、①プロヴディフ旧市街主要入り口2箇所には設ける駐車場とガイダンス施設の整備、②Georgiady Houseの展示備品の充実、③古代ローマ遺跡であるネベ・テベのガイダンス施設の整備である。(麓 和善)



## (2) 文化遺産と都市開発の課題検討小委員会

先の理事会で発足した「文化遺産と都市開発の課題検討小委員会」は、特に国際的な課題のある文化遺産について、その都市開発等からおきている課題を検討する仕事を担当する。当面は、世界遺産白川村の交通問題と、昨年の愛媛県松山市CIAV委員会決議を受けての鞆の浦の保存問題について、活動している。山場を迎えている鞆については、今回の9月10の理事会での決定をえて、関係各方面への要望等をしていくことになった。

別に記事として紹介するのは、9月13日の広島県福山市の地元市民団体対が主催する「鞆まちづくりシンポジウム」で、益田が発表する資料である。このシンポジウムでは、イコモスからは益田の他、矢野和之委員伊東孝委員が参加し、また広島大学から三浦正幸教授が参加。それぞれの分野から文化遺産保護の重要性を訴える予定である。関係各位のご指導ご助言をよろしく願いたい。(益田兼房)



## 審議事項

### 1. 入会者および退会者の承認

#### (1) 入会者(個人)

氏名	所属	推薦者
木方十根	名古屋大学大学院工学研究科助手	前野まさる・矢野和之
曾宇泰子	長岡造形大学環境デザイン学科教授	飛田範夫・宮城俊作
佐伯徳哉	鳥根県教育庁文化財課 世界遺産登録推進室	本中 真・斎藤英俊
村松 伸	東京大学生産工学研究所助教授	西村幸夫・前野まさる
高瀬 裕	(株)キヤドセンター取締役	福島綾子・矢野和之
山田 修	(株)キヤドセンター主任研究員	福島綾子・矢野和之
今川俊一	(株)都市環境研究所研究員	西村幸夫・矢野和之
足立克己	鳥根県教育庁文化財課 産業遺跡/石見銀山	稲葉信子・本中 真
田中義昭	鳥根県文化財保護審議会委員 鳥根考古学会会長	大國晴雄 矢野和之
卜部吉博	鳥根県教育庁埋蔵文化財センター所長	大國晴雄 勝部昭
林 泰州	鳥根県大田市役所総務部石見銀山課	大國晴雄 益田兼房
中田健一	鳥根県大田市役所総務部石見銀山課 主任技師	大國晴雄 稲葉信子
遠藤浩巳	鳥根県大田市役所総務部石見銀山課	大國晴雄 益田兼房
中島直人	東京大学大学院工学系研究科助手	西村幸夫 矢野和之

#### (2) 退会者

黒川直樹 都立大学 会費未納4年(本年含まず)  
本人の届け 都合による

### 2. 会費滞納者

個人 12年滞納者(12万円)が、今回間違いなく支払うと確約。その他5年分/1名(5万円) 4年分/1名(4万円) 3年分/5名(15万円) 2年分/7名(14万円) 本年分/26名(26万円) 個人計81万円  
維持会員/2社(10万円) 滞納額は総計91万円となっている。

### 3. 西安ICOMO総会出席者と選挙問題について

参加者) 赤坂信、伊藤延男、稲葉信子、井上敏、大河直

躬、大野渉、岡田保良、杉尾邦江、杉尾伸太郎、西村幸夫、福島綾子、前野まさる、益田兼房、矢野和之、渡辺保弘、総会出席15名、投票者14名

各国のICOMOSは投票権を18票持ち、1人当たり本人以外に5票の権利を持ち、今回は4票の委任状を用意する必要のあるとする従来の方法について、総会でのvoting memberの定義に関して疑義があるという意見が出た。このためこの件は現在、照会中。

### 4. 写真測量Photogrammetry委員会

Voting Member 西村康氏から高瀬裕氏との交替とAssociate委員、山田 修氏の追加について提案され、了承された。

### 5. Rock Art 委員会Associate memberについて

Rock Art (CAR) 委員会から五十嵐ジャンヌ氏のCAR参加を11月の理事会で審議し、結果を12月に通知するので日本イコモス国内委員会でもご承認願いたいという要請があった。

### 6. 後援依頼

以下の講演依頼があり、承認された。  
世界考古学会議中間会議大阪大会  
2006年1月12日～15日/NPO文化財保存機構  
テーマ「共生」の考古学～過去との対話、遺産の継承～

### 7. Legal Issues 国際分科委員会

Legal Issues 国際分科委員会が、今年の11月23～26日にブリュッセルで開催されることが河野俊行理事から連絡があった。

### 8. 次期理事会総会日程について

2005年12月17日(土)京都開催の意見が出されたが、未決定。

港湾都市「鞆の浦」の歴史を活かしたまちづくり  
緊急提言

Urgent Proposal for the Town Planning of Harbor Town  
"Tomo-no-ura" in Consideration of the History

立命館大学教授 益田兼房  
(日本イコモス国内委員会委員)

「鞆を愛する会(代表大井幹雄氏)」の提言書「新たな時代に向けた鞆のまちづくりー活力ある地域再生と心豊かなまちをめざしてー」(平成17年8月改訂版)を拜見しました。これは、今後の鞆や福山のまちづくりに、明るい大きな展望を示すものと思われ、文化遺産保護の専門的な立場から、ここに緊急の提言をさせていただく次第です。

1) 鞆の歴史的文化遺産の価値の高さは、既に国県市の文化財指定を受けているものだけでなく、未指定の文化財である町並み・港湾土木遺産・文化的景観等についても、専門家たちが明らかにしています。提言書の「県道山側トンネル案」は、これらすべての文化遺産の保存を可能にするだけでなく、観光地としての鞆の未来も明るくするように、思われます。

昨年には、イコモス(ICOMOS国際記念物遺跡会議)の民家建築国際専門分科委員会(CIAV)で、鞆の保存と港湾横断道路橋による破壊への危惧を表明した、鞆宣言(文末参照)が採択されました。また同じく文化的街道国際専門分科委員会では、日本の世界遺産候補として朝鮮通信使のルートが挙げられており、鞆はその中心的な存在として韓国イコモスでも注目されています。イコモスは、世界遺産条約により、世界文化遺産の学術的価値評価等を担当している、各分野の専門家からなるユネスコの国際NGOです。このように国際的にも鞆の保存に関心が高いのは、外国人専門家たちの目から見て、その価値が国際的に高いと言うことでしょう。瀬戸内の歴史的港湾ネットワークの要として鞆が保存できれば、将来的には世界文化遺産、つまり世界的な文化観光都市も夢ではないかもしれません。

2) 日本の代表的な歴史的港湾都市として鞆を観光的に将来に活かす場合は、文化遺産と観光を軸とした、大がかりな国家レベルでの公共投資が必要となるはずで

ず。例えば、国土交通省は、歴史的港湾環境創造事業を全国で行なっていますが、鞆の港湾土木遺産5点セット(波止・雁木・焚場・常夜灯・番所)を文化遺産として本来の修復保存する場合、浚渫も含め相当額の公共事業が必要です。瀬戸内を開く観光や漁業等のための新しい港湾整備も、文化遺産となる鞆港とは別の場所でも必要でしょう。文化遺産に調和した道路事業として、県道の港湾横断道路橋に替わる山側トンネルバイパス道路のほかに、地域住民や観光客等のための、歩行者主体の歴史的街路や駐車場等の歴史的地区環境整備街路事業が、鞆とその周辺地区で必要となります。歴史的な町並みの保存整備事業は、官民の数十年にわたる継続的な努力が必要ですが、やはり相当額の事業となりましょう。

これらの公共事業投資は、合計で港湾横断道路橋事業費のおそらく4倍を超えると見られます。現在年間百万人を越えるという世界遺産白川村の観光客は過剰ですが、国際的な歴史的港湾都市として保存された場合の鞆の観光収益は、相当額に達すると見られます。巨額に見える公共投資も、長期的には観光関連収益の税金から回収可能で、決して税金のムダ使いとはなりません。関連民間投資とともに、広島県東部地域全体の経済を長期に活性化し、歴史を活かしたまちづくりの全国的なモデルにもなりうるのではないのでしょうか。

3) もしも、鞆で港湾横断道路橋が建設されれば、「日東第一」と謳われた景勝美を失い、各種の歴史的文化遺産の価値を減らし、おそらく鞆で最後の大型公共事業となるだけでなく、景観と観光資源破壊の日本最悪の公共投資として、福山市は東アジア地域の歴史に名を残すこととなるのではないかと心配です。広島県だけでなく瀬戸内のこの地域の将来のための、各分野にわたる総合的な都市政策の比較検討が、いま最後の機会として望まれます。





十年後、百年後の未来を見据えた選択をまえに、私たちは今どのようなまちづくりを鞆すべきか問われています。都市計画・交通計画・歴史的港湾・文化遺産・トンネル工法等の関係各分野について、全国レベルの大学教授等専門家が参加する客観的かつ総合的な比較検討の場を、検討委員会などとして行政側で設置されましよう、切望する次第です。

平成17年9月

### 緊急提言書 付属参考資料：「鞆宣言」

2004年10月愛媛県松山市にて開催の、イコモス民家建築国際専門分科委員会（ICOMOS ISC Vernacular Architecture, CIAV）にて採択。

#### 鞆 宣言

広島県福山市の港町鞆の浦は、極めて特色のある町で、現在、ワールド・ウォッチの危機遺産リストに登録されている。ここには、19の寺院も含めて、約百棟の江戸時代の建物と約百棟の明治時代の建物が現存している。その一部は、広島県福山市等や地域の保存団体「鞆まちづくり工房」などによって、これまで修復がなされてきている。

町には、1960年代におこなわれた道路の大型拡幅をはじめ、質の低い現代的な開発や意図的な破壊の痕跡も見ることができる。今、最も差し迫った脅威は、古から残る港を横断する道路橋の計画である。この計画は住民の強い反対を受けて凍結の状態にあったが、再び復活の動きがあらわれている。

昨年には、保存事業にかかわる民間オーナーへの助成は途絶え、古い漁網会社などの公共の建築は空いたままである。水産会社による沿岸の違法な建築行為は止められていない。町なかの古い建物が多く壊され、駐車場に転用されている。

#### 提言

イコモス民家建築国際専門分科委員会（CIAV）は、鞆ですすめられてきた修復や再活用の行為を重要と考え

る。同時に、鞆の港と町の将来について、懸念を表明する。

そこで、イコモス民家建築国際専門分科委員会（CIAV）として、日本国政府、広島県庁、福山市役所に対し、以下を提言する。

1. 鞆の港に計画されている道路橋の建設計画を承認せず、必要ならばトンネルの建設やフェリー等の代替案を検討すること。
2. 鞆の古い建造物の、これ以上の取壊しの防止。
3. 沿岸に建てられた違法建築物の除去。
4. 建造物の修復に向けた、地元団体や個人への支援。
5. 鞆の町の保存にむけた、総合計画の作成と推進。

<以下、英語原文>

#### TOMO

The fishing port of Tomo-no-Ura, Fukuyama City, Hiroshima Prefecture, is a unique township, and is inscribed on the World Watch Endangered Heritage List. It contains approximately one hundred Edo period and one hundred Meiji buildings, including nineteen temples. Some buildings have in the past been restored by Hiroshima Prefecture, Fukuyama City, Tomo Urban Planning Factory, a local conservation group and others.

There is also much low grade modern development and much deliberate damage, including a drastic road widening of the 1960s. The major threat is now a proposed road bridge which would cut right across the ancient harbour. This was resisted by many local inhabitants, and the proposal has been dormant for some time. Now there are moves to revive it.

Last year subsidies to private owners for restoration ceased. Government-owned buildings such as the old fishing net factory have been left vacant. Illegal building on the foreshore by fishing companies has not been stopped. Old buildings in the town have been demolished to create car parking.

Resolution:

The Comité International d'Architecture Vernaculaire (CIAV) recognises the important work of restoration and rehabilitation which has taken place in Tomo. At the same time it expresses its apprehension for the future of the port and town. Accordingly CIAV calls upon the Japanese National Government, the Hiroshima Prefectural Government, and the Fukuyama City Government:

1. To repudiate the proposal for a road bridge across Tomo harbour, and if necessary to investigate alternatives such as tunnelling or a car ferry.
2. To prevent further demolition of old buildings in Tomo.
3. To remove illegal buildings from the foreshore.
4. To support local groups and individuals in the restoration of buildings.
5. To develop and implement a comprehensive plan for the conservation of Tomo.



「鉱山遺跡の顕著な普遍的価値と  
保存管理に関する専門家国際会議」を開催  
Experts Conference on the Universal Value of Mine Heri-  
tage and the Conservation

島根県教育庁文化財課世界遺産登録推進室 主幹 足立克己

世界遺産候補の石見銀山遺跡が所在している島根県大田市で、2005年6月1日～4日の4日間にわたって「鉱山遺跡の顕著な普遍的価値と保存管理に関する専門家国際会議 ～石見銀山遺跡を事例として～」が開催された。

1526年に発見された石見銀山は、大航海時代のヨーロッパで作成された日本地図にも「銀鉱山王国」「銀鉱山」などその存在が記載された日本を代表する銀鉱山である。16世紀～17世紀初頭、石見銀山で生産された銀は貿易によって東アジアに流通し、東アジア経済や西洋との文化交流に大きく貢献した。

石見銀山遺跡は、このような石見銀山の採掘から精錬まで行なわれた鉱山跡を中心として、それに伴って発達した鉱山町および支配関係の山城跡、銀・銀鉱石の積み出しに利用された二つの港湾と港町および港湾集落、そしてそれらを結んで銀・銀鉱石や諸物資を輸送した2本の街道などから成り立つ。

島根県と石見銀山遺跡の所在地である大田市、温泉津町、仁摩町（一市二町は2005年10月1日に合併して大田市）は、1996(平成8)年から同遺跡の世界遺産登録に向けた取組を始め、2001(平成13)年4月に暫定リスト入りを果たした。そして2007年の登録を目指して、来年1月末までに日本政府からユネスコに正式に推薦書が提出される予定である。

さて近年、世界遺産の推薦に当たっては、推薦候補資産に類似した遺産との比較検討を行い、推薦候補資産の顕著な普遍的価値について証明することが強く求められている。そのため、鉱山遺跡についても他地域との比較研究が強く望まれていた。

このような情勢から、推薦書の提出に先立って、特に東アジア地域の鉱山遺跡の顕著な普遍的価値やその保



存管理の在り方について国際的な共通認識を深めるとともに、石見銀山遺跡の顕著な普遍的価値を明らかにする国際学術会議を開催することになった。会議は、文化庁・島根県等の主催により、日本イコモス国内委員会の協力を得て、大田市の島根県立男女共同参画センター「あすてらす」において開催された。会議には、海外からイコモス名誉会員のヘンリー・クリア氏(イギリス)、国際産業遺産保存委員会(TICCIH)事務局長のステュアート・スミス氏(イギリス)、スロヴァキアイコモス委員長のヴィエラ・ドヴォジャークヴァ氏、メキシコ国立人類学歴史研究所のイネス・エレラ・カナレス氏、中国イコモス副委員長の郭旃氏、日本から九州大学名誉教授井澤英二氏、鹿児島大学助教授大田由紀夫氏合計7名の専門家のほか、石見銀山遺跡調査整備委員会のメンバー3名、日本イコモス国内委員会から2名、地元県市から2名文化庁から3名の総勢17名の専門家が参加した。

会議では、1994(平成6)年から始まったGlobal Strategyの取り組み、2003(平成15)年に採択されたTICCIHの「ニジニー・タギル憲章」、2004年にICOMOSが世界遺産委員会に提出した世界遺産一覧表の中の格差に関する報告(The World Heritage List: Filling the Gaps — an Action Plan for the Future)などの文脈を考慮しながら鉱山遺跡の普遍的価値や保存管理について鉱山技術や環境への影響などの面から積極的な議論が展開された。そして、会議の最後に参加者全員により結論がまとめられた。その内容は、前文と4章の本文からなり、第1章では産業活動に関わる遺産の価値評価、第2章ではその保存管理等について述べられ、第3章で石見銀山遺跡の意義、第4章で今後の課題について触れている。

今回のこの会議での大きな特徴は、世界遺産リストに正当に反映されていない鉱山遺跡を含む産業活動に関わる遺産について注目し、それら地域固有の資産がもっている顕著な普遍的価値を正当に評価すべきであり、産業革命以前に属する遺跡の中にも産業活動に関わる遺産として評価されるべきものがあることを説いている点である。そして、特にアジア地域にあっては、それらが考古学的遺跡として遺存している場合が多い

ことから、考古学的視点と、文化的景観、さらには無形の要素にも配慮した研究をするよう喚起したことである。また、保存管理についても、上記の点を踏まえ、さらに遺産の多くが広域にわたって多様な構成要素で成り立っている場合が多いことから、包括的に保存管理するための大綱と、個別の保存計画の必要性を説くとともに、保存管理の具体的内容とその方向性を示している。

石見銀山遺跡の意義については、1) 大航海時代に石見銀がヨーロッパと東アジア・日本との経済的・文化的交流を生み出したこと、2) 小規模な労働集約型経営に基づく運営形態の痕跡が考古学的遺跡として良好に遺存していること、3) 銀鉱山経営に関わる活動の総体が文化的景観として良好に保存されていることの3点から、世界遺産としての評価が可能であることが確認された。

なお、この会議の結論については、島根県のホームページで見ることができる。

(<http://www2.pref.shimane.jp/ginzan/news/n170601.html>)。また、会議の発表要旨集は島根県教育庁文化財課(TEL0852-22-5642)で入手可能。



## お知らせ

第9回 US/ICOMOS 国際シンポジウム開催とアブストラクト募集について以下に紹介する。

### The 9th US/ICOMOS International Symposium Newport, Rhode Island, April 19-22, 2006

US/ICOMOS - the United States Committee for the International Council on Monuments and Sites

The long conversation between the American preservation experience and international programs has had a huge influence on the protective and management standards established in the World Heritage Operational Guidelines, something that continues to this day. In the international back-and-forth exchange of ideas contributions are adapted and transformed in ways that often improve them beyond recognition. When these return to our shores, along with fresh innovations from abroad, they find new applications as entirely new solutions to our own domestic challenges.

It is in this spirit of learning from each other that the 9th US/ICOMOS International Symposium will convene on 20 to 22 April, 2006, in historic Newport, Rhode Island, to look once again at the World Heritage Convention and its List as a rich source of models to improve the protection and management of the vast heritage of the United States, as well as to share with others some of our more recent national, state and local initiatives and approaches that may be applicable to World Heritage sites, with a particular focus on World Heritage cities, but not to the exclusion of other categories of sites.

The World Heritage Convention is not just about the World Heritage List, but about every country's "duty of ensuring the identification, protection, conservation, presentation and transmission to future generations of the cultural and natural heritage...situated on its territory" (Art 4 of the Convention)

While the World Heritage List may seem like a tool for international cooperation exclusively for the sites inscribed in it, it really accomplishes more than that. By establishing minimum standards for significance, authenticity and management for all sites inscribed, the List also helps each country in developing the know-how needed to protect the full range of its cultural and natural resources, and in setting up paradigms that have broad national applicability.

The 9th Symposium will also look at the participation of the United States in the World Heritage Convention in relation to other countries to identify ways in which US/ICOMOS and other US heritage organizations can support our official agencies in fulfilling our international cultural commitments to both the Convention and to UNESCO.

As in years before, US/ICOMOS is issuing this universal call for abstracts that relate innovative experiences, preferably related to World Heritage sites, that deal with the full range of challenges associated with historic urban centers and towns, in accordance with the following sub-themes:

1. Different perceptions of historic cities and sites and consequences on their protection and management.
  - a. Cities inscribed or being nominated to the World heritage List are "packaged" very differently in terms of what outstanding universal value is attributed to them: as coherent urban units, as museum cities, as linear developments, as art cities, as cultural landscapes, or even through serial representation of its major monuments. What are the implications of such conceptualization on the comprehensive protection of the totality of the city's values—both tangible and intangible?
  - b. What are the challenges posed in regulating the buffer zones around World Heritage cities and towns? What levels of control are appropriate or desirable in buffer zones?



2. Lesson from World Heritage cities or sites in creating broader sustainable protection strategies

a. What has been the “ripple effect” of World Heritage cities and/or sites on other historic cities in the same country?

b. Each historic place is built in unique ways, and to be maintained and preserved, traditional craft skills need to be perpetuated. Are there unusual programs to guarantee that such skills will continue to be transferred to the coming generations? Or if lost, programs for reviving them?

c. Historic cities and heritage sites are more than a material and spatial reality, they are containers of identity and the stage for ancestral communal rituals and traditions. Are there innovative ways of managing both the tangible and intangible values comprehensively?

d. All cities, save museum cities, are evolving organisms, requiring change, demolition and new construction. Historic cities need management to limit these changes. What are some of the development forces in World Heritage cities and how are they being managed? In a post-industrial world where there is no longer consensus on basic unifying architectural expressions, how is new construction being integrated into historical urban contexts?

e. The nomination of sites to the World Heritage List is at times driven by agendas focused on finding sustainable solutions, such as urban rehabilitation, period restorations, or tourism development. What are the pitfalls and successes in these single focus agendas?

3. Examples of World Heritage sites in building public awareness and support.

a. Is World Heritage status being used as special advantage in promoting support for heritage preservation? Are there particularly successful program for doing so?

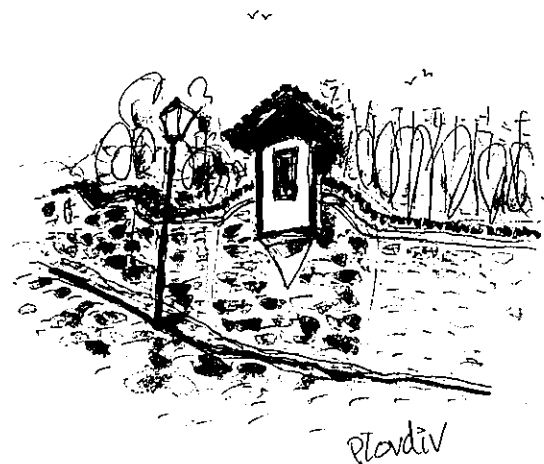
b. Have indicators been developed to gauge success and failure in preservation, and are they being used to foster public awareness?

c. The geographic and social mobility of our times has meant that stakeholder communities and descendants of the

creators of heritage sites and cities are increasingly physically dissociated from the place, and being replaced by newcomers from elsewhere with no links to the place. How are ties created with these new populations to foster support for preservation and for the traditional values attributed to the place?

US/ICOMOS will accept electronic (Microsoft Word or Adobe pdf. files only), or hard copy abstracts with a maximum text of 250 words, in English. Abstracts must be received in US/ICOMOS by 31 October 2005. The page with the abstracts must contain the title of the propose paper, the name of the author(s) and the contact information. Abstracts may be accompanied by one (1) illustration only.

A committee of distinguished preservationists will evaluate all abstracts. Authors selected for presentation will be notified by 1 January 2006 at the latest.



# 日誌 事務局

(2005年6月1日～2005年9月13日)



## 2005年

- 6/1-4 「鉱山遺跡の顕著な普遍的価値と保存管理に関する専門家国際会議」～石見銀山遺跡を事例として～  
が島根県大田市で開催される
- 6/10 「文化遺産と都市開発の課題検討」小委員会開催（於：文化財保存計画協会 会議室）
- 6/13 「FRONTIERS OF THE ROMAN EMPIRE」by DAVID J BREEZE - SONJA JILEK - ANDREAS  
THIELを2冊受領
- 6/17 島根県より「鉱山遺跡の顕著な普遍的価値と保存管理に関する専門家国際会議」の資料報告書を受領
- 6/23 「文化遺産と都市開発の課題検討」小委員会開催（於：文化財保存計画協会 会議室）
- 7/1 [JAPAN ICOMOS INFORMATION]第6期6号発行 維持会員を含む全会員、関係団体に順次送付
- 7/9 プロヴディフ旧市街地保存事業小委員会 第16回会議開催（於：文化財保存計画協会 会議室 午後1時より）
- 7/13 (社)日本ユネスコ協会連盟より「ユネスコ」2005 7 Vol. 1098を受領
- 7/29-8/3 プロヴディフ旧市街地保存事業小委員会 ブルガリア、プロヴディフでワークショップを開催(8/2-3 Plovdiv work  
shop :Architectural Preservation Practice in Bulgaria and Japan 開催) 石井 昭氏、前野まさる氏、  
藤 和善氏、矢野和之氏が出席
- 8/10 イコモスインフォメーション誌編集会議
- 8/17 US/ICOMOS より「Newsletter number2-second quarter of 2005」を受領  
ICOMOS Thailand より「Newsletter no. 4 April-July 2005」を受領
- 8/25 ICOMOS パリ本部より「Heritage at Risk」2004/05を受領
- 8/29 リチャード・エンゲルハルト氏を囲む会（於：韻松亭 午後6時30分～）
- 8/31 (社)日本ユネスコ協会連盟より「ユネスコ」2005 9 vol.1099を受領
- 9/6 イコモスインフォメーション誌編集会議
- 9/10 第3回拡大理事会開催（於：文化財保存計画協会 会議室 午後2時～）
- 9/13 福山市で鞆まちづくりシンポジウム開催（於：福山市 サンピア）  
テーマ：鞆は福山の財産 - 歴史と生活の共存するまちづくり -

## 日本イコモス国内委員会 維持会員（代表者）

株式会社 尾田組（尾田芳信）	株式会社 鴻池組（大岩祥一）
株式会社 総合計画機構（糸谷正俊）	株式会社 都市環境研究所（矢嶋啓自）
株式会社 乃村工務社（乃村義博）	株式会社 ブレック研究所（杉尾伸太郎）
株式会社 文化財保存計画協会（矢野和之）	「国宝松本城を世界遺産に」推進委員会（有賀正）
株式会社 トリアド工房（伊藤民郎）	西武建設株式会社（松下和徳）
株式会社 京都科学（片山保）	(敬称略・順不同)

日本イコモス国内委員会の活動には以上の企業のご支援をいただいております。

●日本イコモス国内委員会 理事会 JAPAN-ICOMOS EXECUTIVE BOARD

President	委員長	前野 まさる	Masaru MAENO
Vice President	副委員長	杉尾伸太郎	Shintaro SUGIO
		町田 章	Akira MACHIDA
Secretary General	事務局長	矢野 和之	Kazuyuki YANO
Trustees	理事	赤坂 信	Makoto AKASAKA
		稲葉 信子	Nobuko INABA
		岡田 保良	Yasuyoshi OKADA
		小野 昭	Akira ONO
		河野 俊行	Toshiyuki KONO
		田中 哲雄	Tetsuo TANAKA
		西浦 忠輝	Tadateru NISHIURA
		濱崎 一志	Kazushi HAMAZAKI
		日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
		益田 兼房	Kanefusa MASUDA
		宮川 朝一	Asaichi MIYAKAWA
		山田 幸正	Yukimasa YAMADA
		渡邊 保弘	Yasuhiro WATANABE
Auditors	監事	沢田 正昭	Masaaki SAWADA
		西谷 正	Tadashi NISHITANI
Advisors	顧問	石井 昭	Akira ISHII
		伊藤 延男	Nobuo ITO
		坪井 清足	Kiyotari TSUBOI

小委員会 WORKING GROUPS

Chiefs	主査	藤井 恵介	Keisuke FUJII
		羽生 修二	Shuji HANYU
		日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
		稲葉 信子	Nobuko INABA
		石井 昭	Akira ISHII

●国際諸委員会参加者 REPRESENTATIVE TO INTERNATIONAL COMMITTEES

Vice President	西村 幸夫	Yukio NISHIMURA
Advisory Committee	前野 まさる	Masaru MAENO
Specialized Committee on:		
Archaeological Management	小野 昭	Akira ONO
	岸本 雅敏	Masatoshi KISHIMOTO
Analysis and Restoration Structures of Architectural Heritage	日高健一郎	Kenichiro HIDAKA
	坂本 功	Isao SAKAMOTO
Historic Towns and Villages	西澤 英和	Hidekazu NISHIZAWA
	福川 裕一	Yuichi FUKUKAWA
Underwater Cultural Heritage	上野 邦一	Kunikazu UENO
Training	荒木 伸介	Shinsuke ARAKI
	稲葉 信子	Nobuko INABA
	工桑 善通	Yoshimichi KURAKU
Historic Gardens and Cultural Landscapes	杉尾伸太郎	Shintaro SUGIO
	本中 眞	Makoto MOTONAKA
Vernacular Architecture	前野 まさる	Masaru MAENO
	大野 敏	Satoshi OHNO
Wood	村上 裕道	Yasumichi MURAKAMI
	伊藤 延男	Nobuo ITO
	渡邊 保弘	Yasuhiro WATANABE
Earthen Architecture	岡田 保良	Yasuyoshi OKADA
Cultural Tourism	宗田 好史	Yoshifumi MUNETA
	石井 昭	Akira ISHII
Legal Issues	河野 俊行	Toshiyuki KONO
Photogrammetry	西村 康	Yasushi NISHIMURA
Cultural Routes	杉尾 邦江	Kunie SUGIO
Stone	西浦 忠輝	Tadateru NISHIURA
	石崎 武志	Takeshi ISHIZAKI
Risk Preparedness	益田 兼房	Kanefusa MASUDA
Rock Art	小川 勝	Masaru OGAWA



## JAPAN ICOMOS INFORMATION

Vol.6, No.7 10 OCTOBER 2005

日本イコモス国内委員会 委員長 前野まさる

事務局担当理事 矢野和之 編集 赤坂 信

〒150-0021 東京都渋谷区恵比寿西1-9-6 アストウルビル3階

株式会社 文化財保存計画協会 気付

Tel & Fax .03-5728-1621 e-mail [jpicomos@kb4.so-net.ne.jp](mailto:jpicomos@kb4.so-net.ne.jp)

### JAPAN-ICOMOS OFFICE

c/o Planning Institute for the Conservation of Cultural Properties

Asutouru Bldg.,1-9-6 Ebisu-nishi Shibuyaku Tokyo 150-0021, Japan

Tel & Fax .+81-3-5728-1621 e-mail [jpicomos@kb4.so-net.ne.jp](mailto:jpicomos@kb4.so-net.ne.jp)